

# 日本大学経済学部卒業生 DB を用いた学修ポートフォリオと就職活動の関連性分析 Study About Relevance Analysis Between Study Portfolio and Job Hunting Using Graduated Database of Nihon University College of Economics

大槻 明<sup>†</sup> 森林美咲<sup>‡</sup>  
Akira Otsuki Misaki Moribayashi

## 1. はじめに

平成20年のリーマンショック直後に大学生の就職状況が悪化したこと記憶に新しく、最近ではコロナの影響で新卒学卒者の就職を取り巻く環境は極めて厳しい。ガベージニュースの記事[1]によると、2017年3月に大学を卒業した者のうち、正規・非正規雇用を問わず就職した人は76.1%。大学院や専修学校、海外への学校へ入学など進学をした人は11.9%。一時的な仕事に就いた人は1.6%、進学も就職もしていない人(就職浪人や資格取得ため勉強、花嫁修行や結婚による専業主婦化など)は7.8%となっている。また、就職した者の中で、非正規就業者、パート、アルバイト、進学も就職もしていない人(進学・就職準備中、家事手伝い、ボランティアなど)を合わせた「安定的な雇用に就いていない人」の率を算出すると、2017年3月度で12.6%となる。

このような状況下においては、望月[2]や厚生労働省[3]も指摘しているように、グランドデザインの一部として大学時代の学びを位置づけ、大学での学びが卒業後にどうつながるのかをキャリアデザインすることが極めて重要であると考えられる。ゆえに、本研究では、大学学部生の就活に役立つ知見導出を目的として、独自にアンケートを作成及び実施し、得られたアンケート結果(142件)を分析した。具体的には、回答数の多い上位5位までの業種を取り上げて、計量アプローチから分析を行うことにより業種の違いによって役に立った授業やゼミ活動にどのような違いがあるのか、もしくは共通性があるのか、といったことを明らかにした。

本研究の成果によって、例えば、情報通信業を目指す

学生がいた時に、実際に情報通信業に就職した先輩が、どのような授業、ゼミ研究及び就職活動が役に立ったのか、ということを知ることができるようになるため、学生の学びと卒業後のグランドデザインをより繋げることができるようになると思われる。

## 2. 先行・関連研究

表1に、本卒業生DB(卒業生DBのために実施したアンケートを含む)と他大学の卒業生アンケートの比較表を示す。他大学の卒業生アンケートは、私立大学3校(法政大学[4]、大東文化大学[5]、東京都市大学[6])と国立大学5校(新潟大学経済学部[7]、岐阜大学[8]、大阪教育大学[9]、お茶の水女子大学[10]、熊本大学[11])の計8校を調査した。

表1のうち、主要なポイントについて述べる。「3大学で学んだこと、授業以外で取り組んだことなど」では、多くの大学で、大学4年間の学びや授業以外での大学生活に関する成果や満足度に係る設問がなされていた。しかし、これが「5就活支援関係」とどのように結びついたのであるのか、ということまでは質問されていないため、大学における学業等の成果が就活にどのように結びついたのであるかが分からない。つまり、他大学のアンケートでは、就職先の情報(誰がどの会社等に就職したか)は蓄積しているが、そもそも在学生の就活支援に主眼を置いた設問項目になっていないため、学業と卒業後の進路の関連性に関する情報が蓄積されていない。対して「5就活支援関係」の(10)以外の設問項目全て本DB独自の設問項目であるため、ここからも、本DBは、他大学の卒業生アンケートよりも、学業と卒業後の進路の関連性を重視していることが分かる。

表1. 日大経済学部卒業生 DB (本研究) と他大学卒業生アンケートの設問項目比較

	本研究	私立大学			国立大学				
		法政	大東文化	東京都市	新潟経済	岐阜	大阪教育	お茶大	熊本
1	個人情報								
(1)	氏名	×	○	×	×	×	×	○	×
(2)	住所	×	○	×	×	×	×	○	×
(3)	性別	×	○	×	○	○	○	×	○
(4)	生年月日(年齢, 年代)	×	○	○	○	○	○	○	×
(5)	結婚・子供の有無	×	×	○	×	×	×	×	×
2	出身学部等の情報								
(1)	卒業(修了)学部/研究科, 学科/専攻	○	○	○	○	×	○	○	○
(2)	卒業(修了)年度	○	×	○	○	×	○	○	○
3	大学で学んだこと, 授業以外で取り組んだことなど								
(1)	大学4年間の学習成果, カリキュラムや授業の	×	×	○	○	○	○	×	○

	満足度									
(2)	大学で最も学んだこと(印象に残った授業など)、取り組んだこと	×	×	×	×	○	○	○	×	×
(3)	初年次教育は十分であったか	×	×	○	×	×	×	×	×	×
(4)	社会人基礎力(マナーやコミュニケーション力など)は身についたか	×	×	○	×	×	×	×	×	○
(5)	授業サポート(履修サポート、教員との相談機会など)が十分だったか	×	×	○	×	×	×	×	×	×
(6)	授業以外の学生生活(学生支援体制や設備も含む)に満足したか	×	×	○	○	○	×	○	×	×
(7)	リカレント教育へのニーズ	×	×	×	×	×	×	○	×	×
4	就職先に関する情報									
(1)	就職先の業種・職種	○	×	×	○	○	×	○	○	○
(2)	就職先の名称(自由記述)	○	○	×	×	×	×	×	×	×
(3)	勤務地・電話番号	×	○	×	×	×	×	○	○	×
(4)	現在の年収	×	×	×	○	×	×	×	×	×
(5)	現在の職場に関する考え方	×	×	×	○	×	×	×	×	×
(6)	現在の職場で求められている能力	×	×	×	○	×	×	×	×	×
5	就活支援関係						×			
(1)	就活を意識した時期	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(2)	就職に役立った授業や学生生活	○	×	×	○	○	×	×	×	×
(3)	就職に役立った授業とその内容(自由記述)	○	×	×	×	○	×	×	×	×
(4)	就職に一番役立ったゼミ研究の内容(自由記述)	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(5)	在学中に取得した資格	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(6)	OB、OG訪問をした回数	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(7)	参加したインターンの回数	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(8)	在学中に通った予備校と学んだ内容	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(9)	後輩へのメッセージ(自由記述)	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(10)	J A B E Eに基づく教育システムは就職活動や卒業後に役立ったか	×	×	×	×	×	×	×	×	○

### 3. 独自アンケートの実施

#### 3.1 アンケート設問項目

独自アンケートの設問項目は表1の「本研究」列に示した通りであるため、表1を元に独自アンケートの概要について述べる。まず、4の(1)、(2)で実際に就職した会社の業種、職種及び企業名を回答してもらい、5の(3)就職に役立った授業名とその概要を、さらに、5の(4)で就職に役立ったゼミの内容をそれぞれ自由記述で回答してもらっている。また、5の(5)～(7)では、在学中に取得した資格を、OB訪問した回数、参加したインターンシップの回数をそれぞれ回答してもらった。

次章からの分析では、これらの回答が業種{4の(1)}の違いによってどのように変化するのか、また業種の違いによらない共通性があるのか、ということに主眼を置いて分析する。この分析によって得られた知見は、例えば、日大銀行を目指す学生がいた時に、実際に日大銀行に就職した

先輩がどのように就活をしたのか、また、就職に役立った授業やゼミ活動は何であったのか、といった学修ポートフォリオと卒業後の進路との関係性について把握することができるようになるため、この関係性を参考に大学4年間の学修ポートフォリオを学生自身が考える、という意味では大学の初年次教育にも活用ができると考えられる。

#### 3.2 アンケートの実施

表1で示したアンケート設問について、表2に示す概要によってアンケートを実施し142件の回答を得た。次章ではこれらのアンケート結果を元に分析を行う。

表2. アンケートの実施概要

実施期間	2016年3月～2020年3月
実施方法	Google Form
回答対象者	日大経済卒業生及び4年生

#### 4. アンケート結果の分析

##### 4.1 アンケート結果の分析 (単純集計)

「就職予定の業種」の内訳を図 1 に示す。次節以降では、下記に示す回答数上位 6 業種を対象として分析を行う。

- ・ 1 位：J 金融業，保険業 (回答数 41，以下のカッコ内の数値も同様)
  - ・ 2 位：G 情報通信業 (32)
  - ・ 3 位：I 卸売業，小売業 (15)
  - ・ 4 位：E 製造業 (12)
  - ・ 5 位：S 公務と R サービス業が同数 (共に 7)
- 以上，上位 6 業種の回答数計 114

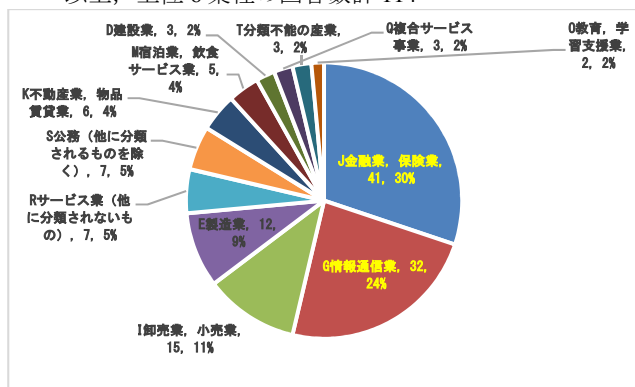


図 1. 就職予定の (もしくは就職した) 業種 (単一回答)

##### 4.2 アンケート結果の分析 (クロス集計業種比較)

###### 4.2.1 就活を意識した時期

図 2 に示す通り，S 公務で最も回答数が多かったのは「2 年生後期 (3/7，当該設問の回答数 / 回答総数，以下も同様)」であり，2 番目に多かったのも「2 年生前期 (2/7)」であった。また R サービス業で最も回答数が多かったのは「3 年生前期 (4/7)」であったが，2 番目に多かったのは「3 年生後期 (3/7)」であった。それ以外の業種も全て最も回答数が多かったのは「3 年生後期」であったため，以上から S 公務は他の業種よりも就活を意識した時期が 1 年ほど早いことが明らかとなった。

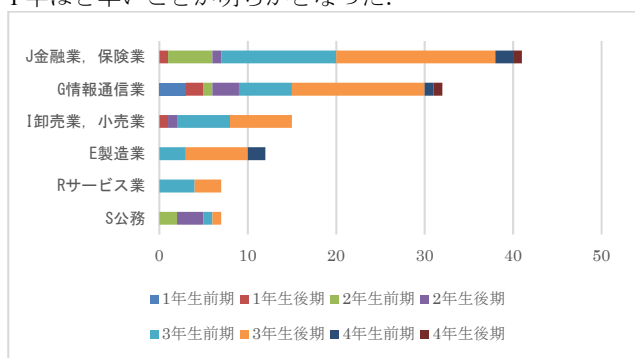


図 2. 就活を意識した時期 (単一回答)

###### 4.2.2 学生生活の中で就職に役立ったこと

図 3 のうち，6 業種それぞれで最も回答数の多かった回答を表 3 に示す。I 卸売業，小売業と E 製造業で最も回答数が多かったのは「バイト」であり，他の業種の最も回答数の多かった項目の全体に占める回答数割合と比較しても

遜色がないため，この結果は中堅私立大学文系の課題を示唆していると考えられるが，6 業種の中で最も多かった (6 業種中 4 業種で回答数第 1 位になった) のは「ゼミ研究」であったため，ゼミ研究が就活にとっても重要な位置付けであることが明らかとなった。なお，S 公務は授業，ゼミ研究，学内就職ガイダンス・説明会，バイトが同数で 1 位であった。

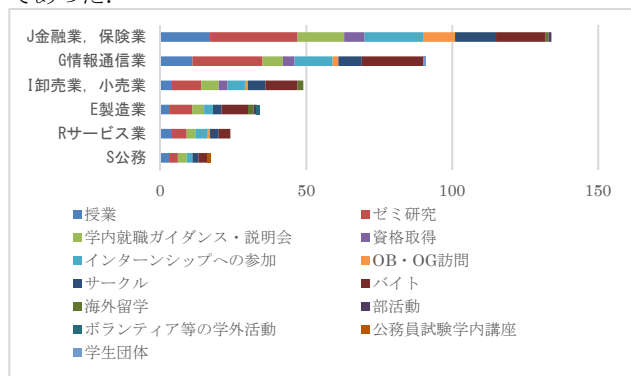


図 3. 学生生活の中で就職に役立ったこと (複数回答)

表 3. 学生生活の中で就職に役立ったこと (最も回答数の多かったものの 6 業種比較)

業種	就職に役立ったこと
J 金融業，保険業	: ゼミ研究 (30 / 134，約 22%)
G 情報通信業	: ゼミ研究 (24 / 91，約 26%)
I 卸売業，小売業	: バイト (11 / 49，約 22%)
E 製造業	: バイト (9 / 34，約 26%)
R サービス業	: ゼミ研究 (5 / 24，約 17%)
S 公務	: 授業，ゼミ研究，学内就職ガイダンス・説明会，バイトが同数 (3 / 17，約 18%)

###### 4.2.3 就職に一番役立った授業

本節のアンケート項目は，「役に立った授業名：その具体的な内容」という形で自由記述してもらった内容である。また，日本大学経済学部のカリキュラム<sup>1</sup>は，総合教育科目，外国語科目，経済学科，経済学科国際コース，産業経営学科，金融公共経済学科に分かれている。以上から，本節の分析コンセプトは，どのカリキュラムや，またカリキュラム内のどの授業が，どの業種の就活に役立ったのかを回答数から明らかにする。さらに，就活に最も役立ったと回答された授業の自由記述テキストをカリキュラムごとに抽出したうえで，TF-IDF を用いて分析することでこれら授業の特徴を明らかにする。

図 4 以降に，カリキュラムごとの回答数業種比較を示す。図 4～8 の授業の総回答数は 92 であった。まず経済学科 (図 4) であるが，6 業種の総回答数は 14 で，このうち最も役に立ったと回答されていた業種は，つまり，経済学科カリキュラムが最も役に立ったと回答されていた業種は「E 製造業 (6)」であった。逆に I 卸売業，小売業では 1 つも回答が無かった。さらにどの授業が具体的に役立ったのかというと，6 業種を通して最も回答数の多かった授業は「マクロ経済学 (3)」であった。

次に，産業経営学科 (図 5) であるが，6 業種の総回答数は 35 で，最も就活に役立ったと回答されていた業種は「J

<sup>1</sup> <https://www.eco.nihon->

[u.ac.jp/graduate\\_school/exam/pdf/curriculum/course\\_system.pdf](http://u.ac.jp/graduate_school/exam/pdf/curriculum/course_system.pdf)

金融業、保険業 (12)」であった。逆に最も回答数が少なかった業種は R サービス業 (1) であった。さらにどの授業が具体的に役立ったのかというと、6 業種を通して最も回答数の多かった授業は「人事労務管理論 (10)」であった。なお、I 卸売業、小売業の回答数が 9、G 情報通信業の回答数が 7 であったため、これらの業界にも産業経営学科のカリキュラムは役立っていたという状況がうかがえる。この場合に、役に立ったと回答されていた授業は、I 卸売業、小売業が「マーケティング論とキャリア形成論 (共に回答数は 2)」, G 情報通信業が「経営情報論とマーケティング論 (共に回答数は 2)」であった。

次に、図 6 (金融公共経済学科) であるが、6 業種の総回答数は 27 で、最も就活に役立ったと回答されていた業種は「J 金融業、保険業 (19)」であった。逆に E 製造業と R サービス業では回答が 1 つも無かった。さらに、どの授業が具体的に役立ったのかというと、6 業種を通して最も回答数の多かった授業は「金融工学 (6)」であった。

次に、図 7 (総合教育科目) であるが、6 業種の総回答数は 14 で、最も就活に役立ったと回答されていた業種は「J 金融業、保険業と G 情報通信業 (共に 4)」であった。逆に R サービス業では回答が 1 つも無かった。さらに、どの授業が具体的に役立ったのかというと、6 業種を通して最も回答数の多かった授業は「情報技術論と哲学 (共に 3)」であった。

最後に、図 8 (外国語科目) であるが、6 業種の総回答数は 2 で、J 金融業、保険業で中国語が、G 情報通信業で英語がそれぞれ 1 つずつ回答されていた。

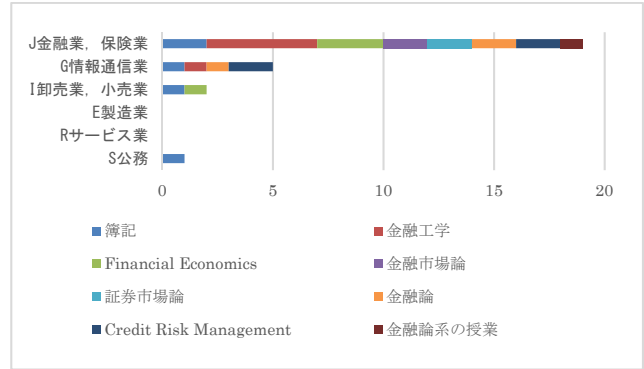


図 6. 就職に一番役立った授業 (金融公共経済学科カリキュラム)

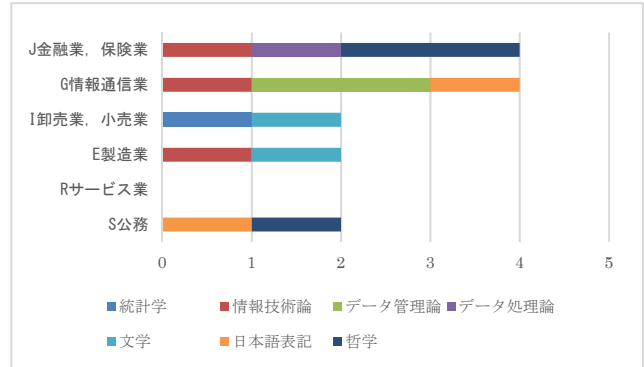


図 7. 就職に一番役立った授業 (総合教育科目カリキュラム)

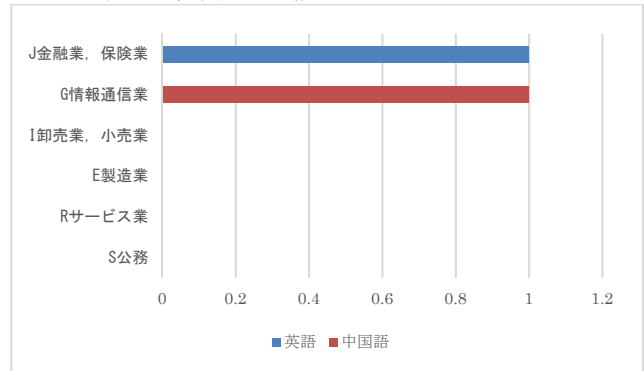


図 8. 就職に一番役立った授業 (外国語科目カリキュラム)

ここで、回答数が 1 つしかなかった中国語、英語及び哲学を除き、図 4~7 それぞれで最も回答数の多かった授業を取り上げて、TF-IDF のアプローチから分析を行う。TF (Term Frequency) は、単語が 1 つの文書中にどれだけ出現するかを表すものであり、IDF (Inverted Document Frequency) は、全文書の中でその単語が出現する文書がどれだけあるかを表すものである。IDF は式 1 にて求められる。N は文書数、df は当該単語を含む文書の数、log は 2 を底とした対数を求める関数であることを意味する。

$$IDF = \log \frac{N}{df} \quad (1)$$

そして、これらを掛け合わせたものが Seki[12]の論文でも示されている TF-IDF である。例えば、似たような文書がいくつかあった場合に、TF-IDF を用いることによって、それらの文書の違いが何なのかを大まかに把握することが可能となる。なお、TF-IDF 分析の品詞には名詞、形容詞、動詞を指定して分析を行った。

図 9 以降に TF-IDF の結果を示す。図 9~12 を目視することで特徴把握が可能のため TF-IDF スコアの表示は割愛するが、まず、図 9 のマクロ経済学の特徴としては、「試験」

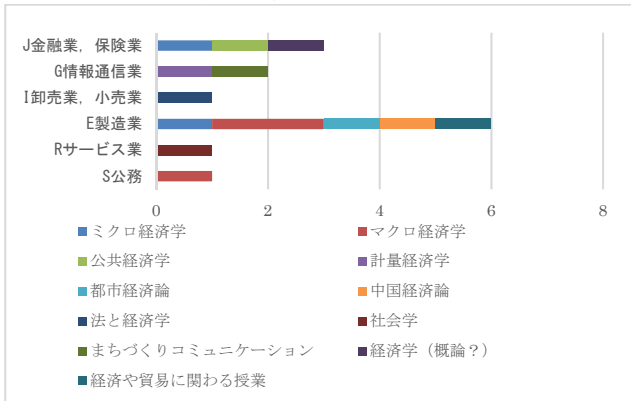


図 4. 就職に一番役立った授業 (経済学科カリキュラム)

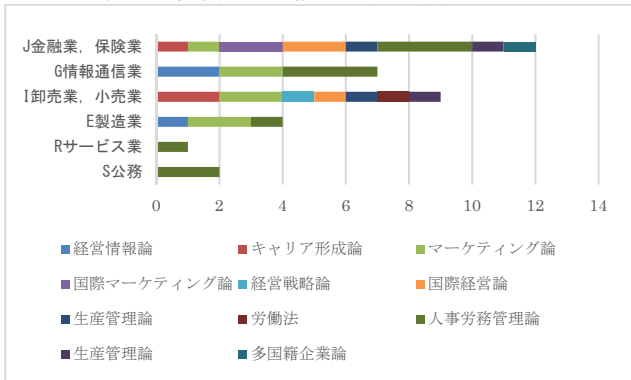


図 5. 就職に一番役立った授業 (産業経営学科カリキュラム)

のスコアが高かった。これに該当する自由記述を確認したところ「公務員試験の試験科目だったから」というコメントであった。その他にも、「経済学といえば、と言うところで、話しやすいしアピールしやすい。」というコメントが見られた。これが図4の製造業に役立ったという知見につながるものであると考えられる。

次に、図10の人事労務管理論の特徴であるが、「会社」や「制度」のスコアが高かった。これらに該当する自由記述を確認したところ「会社の人事制度やしぐみについて学べたから」、「働き方や制度について学ぶことができたから」、「会社を見分ける目利きのようなことを学べたから」といったコメントが見られた。その他にも、「就職に関する基本的思考が身についたから」、「就職先をよく見るきっかけになったから」、といったコメントも見られた。

次に、図11の金融工学の特徴であるが、「学習」や「知識」のスコアが高かった。これらに該当する自由記述を確認したところ「ポートフォリオ理論を学習して、面接で金融知識について語る事ができた。」、「ゼミの内容と重複している部分が多数あり、学習、知識の助けとなった」といったコメントが見られた。その他にも、「志望動機を言うときに絡めやすかった。」、「名前がキャッチーだったのか、良く聞かれた。」、「ゼミの専攻科目で、最も力を入れた科目であり、それをアピールできたから。」といったコメントも見られた。

次に、図12の情報技術論の特徴であるが、「知る」、「パソコン」、「スキル」といったスコアが高かった。これらに該当する自由記述を確認したところ「最低限のパソコンスキルを知ることができたから。」、「ITの基礎を学ぶことができたから」といったコメントが見られた。



図9. TF-IDF 分析の結果（マクロ経済学）

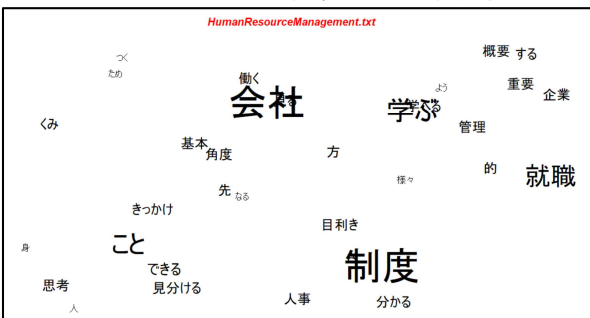


図10. TF-IDF 分析の結果（人事労務管理論）

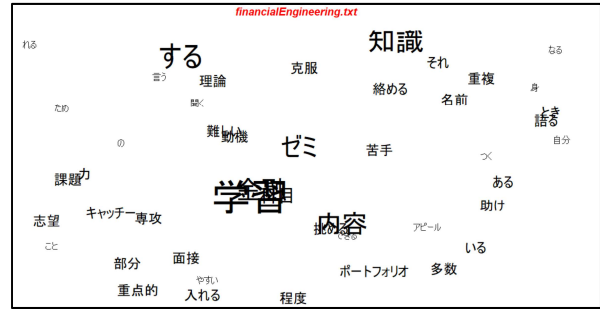


図11. TF-IDF 分析の結果（金融工学）



図12. TF-IDF 分析の結果（情報技術論）

#### 4.2.4 就職に役立ったゼミ研究・活動の内容

本節の設定も自由記述で回答してもらったため、ゼミに関する自由記述テキストを業種ごとに分類したうえで、TF-IDFを用いて分析することで業種ごとにどのようなゼミ研究や活動が役に立ったのかを明らかにする。

まず、金融業・保険業（図13）であるが、TF-IDFスコアが高かったTOP3は、「金融（23.3）」「分析（14.3）」、「専門（10.3）」といった単語であった。これらの自由記述を確認したところ、次のような内容であった。

- ・ゼミでの研究活動を通じ、世界的な中央銀行による金融政策の影響や、金融市場における各種金融商品の価格形成メカニズムを把握することができ、当該分野に関する高い専門性を身に付けることができたこと。
- ・データ分析を繰り返した事によって、金融の問題に関して自分の意見をしっかりと持つことが出来るようになった
- ・専門用語をたくさん吸収したので、金融の企業説明会で困ることが無かった。

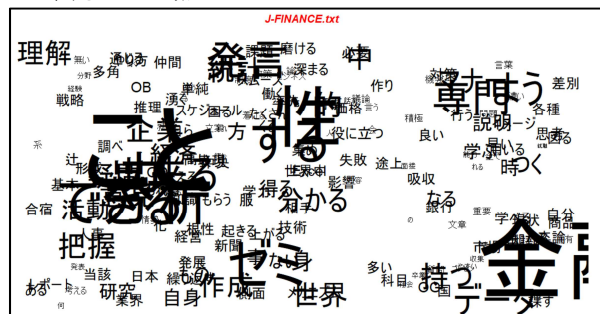


図13. 就職に役立ったゼミ研究・活動の内容（金融業、保険業）

次に、情報通信業（図14）であるが、TF-IDFスコアが高かったTOP3は、「大会（5.2）」「ゼミ（4.0）」、「データ（3.2）」といった単語であった。これらの自由記述を確認したところ、次のような内容であった。

- ・学会大会に向けた準備。本気で取り組んだという事自体と、それを通して様々な事を体験し、学んだ。

